

## 小松文芸賞

## 祭り

千代町 下道 あつ

杵<sup>とほ</sup>き日の太鼓の響き笛の音が町を包みて言葉の要らず

先を練る御輿の後を二十五基の切籠は進む時に止まりて

ゆつたりと焦らずが如く進み来る輪島切籠の傾ぎ懐かし

一瞬によみがへる父の肩車切籠に従きし一夜さの夢

目つむれば夜空を焦がす松明と並みし切籠の遠き掛け声

## 選評

永井正子

今回は十七編の応募があり、かつて小松にお住まいで関東在住の二人の作品もある。嬉しいことである。

小松文芸賞は下道あつ作品「祭り」を推薦したい。一連は感動を一旦胸に納めて、自らの言葉とリズムで歌い出されており、一見素朴だが、しみじみとした感動が胸を打つ。輪島から嫁いだ作者の、ふるさと賛歌でもあり、一首目「杵<sup>とほ</sup>き日の太鼓の響き」、五首目「父の肩車」など過去の記憶と現在が交錯、わずか五首の中に輪島の切籠祭りを描ききっている。平易な言葉を駆使しながら、驚くべきことに祭りの騒音は一切なく、むしろ無声映画に似た手法で読み手の想像力を掻き立てる。

良い歌とは歌の事実そのものが消え、何かが静かに胸に残る歌でそれが感銘である。